

## 現代フォークロアの理論

——ヘルマン・バウジンガーの〈科学技術世界の  
なかの民俗文化〉に寄せて——

河野 眞

**On the theory of Current Folklore — an Examination of Hermann Bausinger's "Folk Culture in a World of Technology" —**

by Shin KONO

### Abstract

The present paper is an attempt to frame a theory of 'current folklore', especially by examining Hermann Bausinger's work, *Folk Culture in the World of Technology* (1961). This paper is also intended to find out how far his theories are valid, when an explanation is made about various aspects of life in the present-day Japan, and to be a study of general rules over the folk life of today under the influence of at once high technology and continuous intermixture of various cultures of the world.

### はじめに

かれこれ4年になるが、「バウジンガーを読む」と題する小文を本誌に載せたことがある<sup>1)</sup>。ドイツの民俗学者ヘルマン・バウジンガーの主著『科学技術世界のなかの民俗文化<sup>2)</sup>』は、民俗学のあり方を改めて問うときには必須の文献と言ってよいが、それを紹介したもので、ちょうど大学院修士課程の学生たちに欧米の民俗学の発達史を案内していたときのことであった。しかし数回分と時間数が限られていたことから、バウジンガーの基本概念を解説するにとどまった。その後数年を経て、再びそのテーマを取り上げることが必要になってきた。今回は学部の2年生と3年生向きに開講した「現代民俗学」への案内である。数回分の講義であるが、主にテキストの後続部分を読みほぐしてみた。

講義自体は年初の計画に沿って進めていたが、図らずも途中で新しい刺激が重なった。アジアの隣国でも、最近、バウジンガーの〈科学技術世界のなかの民俗文化〉の理論への注目が始まっているのである。中国の民俗学界において、アメリカを経由してその情報が伝えられ関心を呼んでいるらしい<sup>3)</sup>。それは決して不思議ではない。中国でのこのところの世相変

化が史上稀な程の速度と規模にあることが、その背景であることは想像に難くない。中国のような奥深い伝統をもつ文化が、現代の世界共通の趨勢とどのようにからみ合い、どこへ行くのかは関心をそそらずにはおかない。それはまた進行しつつある現実を、民俗学が説明し果せるかどうかという問題でもある。

現代社会において伝統文化の持つ意味を問えば、それぞれの国の独自な問題があるのと並んで、意外に大きな比重を占めるが、世界的に共通の動向である。日本でもかつて経験された生活用具の電化製品への全面的な切り替わりやモータリゼーションといった生活革命は、いずれかの国や文化に特定のものではなく、世界の広い地域に共通する変化である。それと伝統との関わりも、他国や他文化ではあり得ない固有の脈絡と並んで、生活革命にさいしてはどこでも起きる諸現象の推移がある。むしろ、後者の側面に注目する方が、問題を正面から扱うことになると言ってもよいくらいである。たとえば、オートバイや自動車をめぐる民話が口にされ、あるいはトゥーリズムのなかで民俗要素が活用されたりする<sup>4)</sup>。しかし一般に民俗学は、そうした動向を観察・分析し、適切に評価する方向では、方法論を鍛えてこなかった。パウジンガーの考察が、1960年前後の所産であり、半世紀近い時間が経過しているにもかかわらず、今なお注目される理由はそこにある。それは決して万能の手引ではないが、そうした問題に本格的に取り組んだ現代の古典なのである。

#### 〈科学技術世界のなかの民俗文化〉の成立

ヘルマン・パウジンガーの初期の著作には、『口承文芸の現在』(1955年)と『新しい移住団地』(1957年)の2篇があるが<sup>5)</sup>、それらについては既に解説をほどこしたことがある。それらをも踏まえながら次に書かれたのが、民俗学者パウジンガーの最も重要な業績される『科学技術世界のなかの民俗文化』である。1959年に教授資格申請論文としてチュービンゲン大学に提出されたもので、刊行は1961年であった。今日にいたるまで、パウジンガーと言えば、何と言ってもこれによって知られている。著者自身にとっても、本書はライフ・ワークの性格をもっている。また第二次大戦後のドイツ語圏の民俗学に展開においても、本書の意義には非常に大きなものがあった。それまで試行錯誤の段階にあった民俗学の進路について、ともかくも原理的な解決の土台が据えられたと言ってもよかったからである。一般の反響も大きく、刊行から3年間に限定しても、少なくとも80種類を越える書評があらわれた。その半数余りはドイツ国内の新聞や雑誌であるが、それ以外ではアメリカやイタリアのラジオ番組や、各国の社会学関係の機関誌での論評がまじっている。ともかく第二次大戦後にかぎって言えば、民俗学の分野でこれほどの話題を呼んだ著作は他にはみあたらないのである。

しかし『科学技術世界のなかの民俗文化』は、大部な書物ではない。本文は、たかだか170頁である。これには、能うかぎりラコンニックな文体をえらんだ著者の気負いという面もないではない。しかしその意図や内容については、さすがに今日からみても炯眼を感じさせると

ころが少なくない。とは言え本書は、一般に民俗学の基本書という触れこみから想像されるような、この分野の各領域や項目を網羅的に論じたものとおもむきが異なっている。たしかに具体例に即した論述がなされてはいるが、著者によれば、その事例やその事例がふくまれる個別領域だけの問題の解決をめざしているのではなく、民俗現象一般に妥当する法則を把握することを念頭においている、と言うのである。

ここでは歴史的連関を問うことは、割愛しなければならなかった。示唆する程度にとどめるほかなかった場合も少なくない。これは、本書の主旨が、歴史性よりも体系性に主眼をおいているためでもあるが、また民俗学の個別領域それぞれの内部展開をたどることにはなく、すべての（あるいは多くの）個別領域に共通した射程の大きな視点を獲得することにあつたからである。たとえば大きくへだたっている個別領域を二種類挙げてみるなら、口承文芸にも住宅民俗にも適用できるカテゴリーに到達することが大事なのである。……（序文）

また挙げられる事例には、〈著者が、これまでどの領域よりも親しんできた〈ゲルマニストに馴染みの深い〉ものが多いと自ら注解しているが、しかしそれを通じて明らかにすることが目指されるのは、民俗現象に広く一般的に妥当性するカテゴリーであるというのである。さらに事例の地域的な特徴をみると、著者の出身地である〈南西ドイツの事例を日刊紙などから拾い挙げていることが多い〉が、だからとてその地域の民俗の解明そのものが意図されているわけではない。〈ここで到達したすべての観点が一般的に妥当するものとなるかどうかは、それらを他の土地にあてはめて検証する必要があるだろう。しかし他面では、古い時代の狭域的な民俗文化のあり方とは違い、今日では、とり上げた空間がどこであるかは、決定的な意味をもたないのである〉。こうした視点の取り方や、それを明言することなどに、伝承文化を個別の伝承事実に即して重視する行き方に対する一種の挑戦がこもっている。

そこで本書の特徴や意義であるが、それをうかがうには構成を見渡すのが手っ取り早い。

- 第1章 〈自然〉な生活世界としての科学技術世界—第1節：民俗世界と科学技術世界，  
第2節：魔法としての科学技術，第3節：〈自然なもの〉としての科学技術，第  
4節：退行を喚起するものとしての科学技術
- 第2章 空間の膨張—第1節：〈場所〉の単一性，第2節：地平の解消—文物の転用性，  
第3節：膨張を刺激するものとしてのエキゾチズム，第4節：ふるさと—磁  
場とかきわり
- 第3章 時間の膨張—第1節：加速現象と定常状態，第2節：民俗文化の再生と保存，  
第3節：あそび幅の狭まり，第4節：歴史の演出

第4章 社会の膨張—第1節：身分文化と単一文化、第2節：〈模倣の体系〉としての民衆（民俗）文化、第3節：センチメンタリズムをイロニーに転換させる諸契機、第4節：ピグマリオン問題

目次を挙げただけであるが、従来の民俗学のテクニカル・タームから掛け離れた実験的な用語が幾つも並んでおり、従来の民俗学を克服しようとする意気込みが伝わってくる。少し解説を付けると、〈退行〉（レグレシオン）や〈加速現象〉（発達加速現象）は心理学用語、〈定常状態〉は生化学用語、〈地平〉はヤン・ティンベルヘンの経済学の概念〈予測地平〉、〈《場所》の単一性〉は演劇論のターム〈三一一致の法則〉のひとつ、また〈センチメンタル〉はフリードリヒ・シラーの文芸論『素朴文芸と情感文芸』からとられており、〈模倣の体系〉はヘルマン・ブロッホの社会評論のなかの表現、といった具合である。そして最終章の〈ピグマリオン〉はバーナード・ショーの同名の戯曲（というよりミュージカル「マイ・フェア・レディ」の原作と言う方が通じやすい）を指しており、花売り娘を貴婦人にしたてようとする言語学者の実験とそこで起きる言語現象を材料にして、身分文化が崩壊するときの法則をとりあげている。

見ようによれば奇を衒っているということにもなるし、またオリジナリティーを強調する狙いもないではないが、基本は真剣な工夫に由来するものとみなければならない。事実、ここで展開された著者の考察には、爾来40年余を経過した今日の私たちにとっても、必ずしもすでに解決済みとは言いきれないものがふくまれている。

第一章は、章のタイトル、節の見出しのいずれをみても、民俗現象と科学技術ないしは科学技術世界との関係があつかっていることが分かる。パウジンガーによれば、今日の民衆文化を考えるとすれば、当然にも今日の世界の基本的な性格を認識するところから始めなければならないが、そこで先ず直面するのは科学技術の産物や科学知識が浸透している世界であると言う。それ自体は突飛な見方でも特に独創的な着想でもない。これまで民俗学があつてきたような村落的な人間の生き方が今日ではもはや存続し得ない所以が問われるときには、常識的に浮かんでくる答えでもある。要するに、汽車、自動車、電話、冷蔵庫、映画、コンバインといった科学的な技術機器が浸透したことによって、昔ながらの村落的な生活様式は、根本的に変化したのである。ところが、変化の主要な原因として常識的に浮かんでくる科学技術について、民俗学はこれまで本格的に考察を加えたことがなかったのである。パウジンガーはそこに関心を集中させて解明を試みたのであり、それはたしかに独創であった。

しかしその著作は、あまり読みやすいものではない。難解というより、もうひとつ要領を得ないというのが一般の印象と思われるが、それも無理からぬところがある。原因は2つある。ひとつは、今も紹介したように、挙げられている事例が南西ドイツの細かな民俗現象であり、それゆえに外部の者には馴染みが薄いのである。それに加えて、第二次世界大戦から程遠からぬ時代の世相から多くの話題が拾われているためである。その地域的な制約と歴史

的な条件のために、具体例に即した叙述として理解を容易にするはずの箇所が実際にはピンと来ないのである。もうひとつは、もっと本質的なもので、ドイツ語圏の民俗学の発達史とそこで行なわれてきた議論や意識されてきた懸案を背景にした論述が厚いことである。もっともその脈絡が通っていたからこそドイツ語圏の民俗学界において画期的な意義が認められたのであるが、そうした生成の土台との有機的な繋がり、ドイツ語圏の外部の者にとっては分かりづらいのである。それは、先行する理論や論議が余りにもドイツ文化に特殊なものであったということでもある<sup>6)</sup>。ともあれ、バウジンガーの考察の形成と不可分であったその2種類の条件が、今日では理解する上での障害となっている。しかし読解上の問題点がそこにあるとなれば、分かり難い民俗事例を他に置きかえることと、ドイツ語圏の民俗学史の脈絡をできるだけ除去して一般理論に読み直すこと、この二つの操作をほどこせば、理解はずっと容易になる。前回の解説において、原著の事例を採らずに、私たちの身近な出来事で代替させたのは、そうした工夫であった。今回は、事例を丹念に置きかえるというわけにはゆかなかったが、同じ視点からの解説である。

## 1. 〈科学技術世界〉と〈民俗世界〉

バウジンガーは、科学技術そのものと、科学技術世界を区別することから説き起こす。科学技術 (Technik) とは自然科学の法則がはたらく場である。それに対して〈科学技術世界〉 (technische Welt, 英語では a world of technology) とは、科学技術の産物によってとりまかれ、それとの交流のなかにある生活世界のことである。用語の面では、ハイデッガーの〈世界内存在〉を踏まえているところがある。因みに科学技術は、生活の場では自然科学の法則通りに理解されるのではないことは、テレビを見るための操作に、テレビを成り立たせている仕組みの専門的知識が必要ではないことから知られよう。それどころか、そうした技術の保持者ですら、生活の次元ではその知識をもって技術機器に接しているわけではないであろう。その点には心理学者や社会学者たちもかねてから関心を寄せてきたが、それにも注目しつつ、バウジンガーは次のように言う。

重要なのは、徹底して合理的な構造をそなえた〈科学技術〉そのものと、〈科学技術世界〉の区別である。——後者のなかでは、前者の合理性が後退して危機に瀕するといったことも起きる。例えばオットー・フリードリヒ・ボルノウがおこなった意識内容の詳細な分析などをみれば、この区別は一層あきらかになる。科学技術と交わっているときの意識は、たいてい専ら次のような意図に向けた固定状態にある。すなわち、〈この科学技術は絶対的に確かである〉。したがって心の深部においては、意識的な行動はまったくなされていない。そこにあるのは、むしろナイーブな行動である。フリードリヒ・ゲオ

ルク・ユンガーも、同じ問題に因んで例を挙げながら、こんな説明をつけた。〈競輪選手やパイロットや機関士の意識は、醒めてはいるが、夜の暗闇のような夢幻的な観念によって限られた狭い場のなかにある。つまり、器械の機能に向けられた機能的な覚醒である。〉それどころかこの覚醒は、そのときかかっている器械の諸々の機能に向いているのではなく、器械を媒介にして出会う現実の薄片にひたすら向けられているようにおもわれる。

それゆえ〈科学技術世界〉という概念の措定は、科学技術という自然科学の対象を精神科学（人文科学）の領域に移し変えることでもある。別の面から言うと、精神科学があつかう領域にも科学技術は広がっている。しかも、科学的な技術機器との交流は、今日の生活の場における基準的な位相でもある。それに較べて、従来の伝統的な生活様式の世界は縮小し後退を続けてきた。すなわち、これまで民俗学が専ら眼をむけてきた〈民俗世界〉（Volkswelt）である。この民俗世界と科学技術世界の対比関係は歴史を通じて常にはたらいいてきたが（それが古くからのものであるとして、バウジンガーが〈機械〉という語の初出とされる『莊子』の一節を挙げていることは前回でふれた）、それが基軸の性格をもつようになるのは近・現代である。そこで、民俗世界と科学技術世界の関係が問題になるが、バウジンガーは3つの主要な契機においてその相関を解明しようとする。

第一は、科学技術という魔術（Magie）ないしは魔法（Zauber）である。科学技術と魔術の関係も古い歴史をもっているが、古い時代には、時人を超越した自然科学の天才や実験者が魔法使いとみられるような誤解の性格を示していた。しかし科学知識が普及して誤解が消えれば、一方が他方を駆逐するというものではない。誤解のなかに潜んでいた本質的な関係がいよいよ姿をあらわすのである。科学技術と魔術の相互交替である。しかしそれを知るには、第二、第三の契機に眼を向ける必要がある。

第二の契機は、科学技術が限りなく普通の環境を形作ることである。すなわち、科学技術世界という〈自然〉であり、それを可能にするのは〈慣れ〉である。たとえば、導入当時は怪物とまで恐れられたこともあった蒸気機関車が、今日ではいとものどかな風物として郷愁をさそうのである<sup>7)</sup>。そうした慣れの進行とは、民俗世界に科学技術世界が浸透し、衝突や融合を起こす過程であるが、そうである以上、慣れの諸段階に対応して民俗文化が発生する。見方を変えると、たとえば〈科学技術の民話〉をはじめとする口承文芸を指標として観察すると、その過程が何であったかが分かるのである<sup>8)</sup>。それは機械の人間化という側面をもあわせもちながら、概括的には、反発・拒否、受け入れ（しばしばイロニーの要素がはたらく）、すたれ・郷愁へという段階をたどる。

第三の契機は、技術機器の故障、あるいは故障において明るみになる人間と技術機器の関係である。すなわち、慣れを通じて〈自然な〉環境となっていた技術機器が、故障によって、突如、冷たい拒絶的な外界に変質する。哲学の用語では〈物体の反逆〉がそれにあたる。技

術機器に故障は必然的であるが、その必然性は現実の個々の故障を超えた意味を帯びて、科学技術世界の周縁部を作り出す。〈機械が言うことをきかないという事態は、口承文芸の一部になっており、またそこであつかわれる対象でもある。しかもその扱われ方は、機械の実際の故障の度合いをはるかに超えている。そうした語りものは、機械が故障を起こすやも知れぬ、また修繕を要する場合があることを指し示すだけではない。むしろこの目的連関を断ち切り、科学技術が総体として限界をもつことを証かすのである。すなわち、その限界線上で、機械の故障は、理知的なあきらめによって受け入れられ、また事態の退行的な克服が発生し、さらにその両者が分岐してゆく。〉

## 退行

この3つの契機において、民俗世界と科学技術世界は関係するが、その関係の近・現代における趨勢を規定するのは、科学技術世界の急速な成長である。成長の速度が緩慢であれば、刺激の度合いは軽微であるが、急激であればあるほど、二つの世界の接触はさまざまな摩擦を引き起こす。それは、概ね退行 (Regression) という概念によってとらえることができる。心理学の用語で、たとえば子供が弟や妹の誕生を機に親の愛情を取り戻すためや心理的な不安定などのために、既に確立していた食事や排泄などの習慣について確立以前の状態に逆戻りしてしまうことを指す。それゆえ成長の過程での後退衝動であり、防衛機制である。その概念が拡大して応用されたのである。また退行を通じて世界が重層化され、しかもそれが一時的なものではなく基本的な構図であることを指し示すという点では、元の概念よりも大きな内容が託されている。パウジンガーによれば、民俗学が学問として成立したこと自体が、社会の大きな動きの中での一種の退行であった。その退行を派生させつつ、基準となる世界が入れ替わってしまったのが今日の状態であるという。それは列車や自動車や飛行機が移動の基準機器であり、馬車や駕籠が伝説的となっていることから知られる。その上、歩くや走るという行動の原始性が、かつてなかったほど重い意味を帯びるようになってきているのは、それが移動における基準の位置からずり落ちたからである。少なくとも、他の基準との並存状態という緊張した関係のなかに入ったからである。森林や緑の樹木との接触にも、それと同じ構図が見出される。それらもうかがええるように、かつては民俗世界をおおって科学技術世界が薄い網の目をつくっていた。その逆転とは、科学技術世界が基準面を形成し、そこに民俗世界が点々と顔を出している構図であることを意味する。しかし、民俗世界は次第に消え失せる運命にあるのではなく、科学技術の普及の隙間を縫って出現する。それどころか、科学技術世界によって新たに生まれ、成長する。むしろそうした様相を含むこと自体が、基準世界としての科学技術世界の必然的なあり方なのである。言い換えれば、科学技術世界とは、民俗世界との絡み合いによって存在する世界でもある。ではその基本的な逆転はどのようにして実現し、そこではいかなる事態が起きているのであろうか。それを知るには、3種

類の基軸において検討する必要がある。空間、時間、社会である。かくして第2、3、4章では、空間の膨張、時間の膨張、社会の膨張がとり扱われる。

## 2. 〈空間の膨張〉

〈膨張〉(Expansion)とは、それに対応する民俗世界の地平(Horizont)の崩壊でもある。〈地平〉とは〈予測地平〉であり、見通しにおける限界や壁のことである。因みに古い時代には、生活世界は独特の地平を伴っていた。しかしそれを説くに先立って、パウジンガーは、村落の観念に再検討をほどこす。村落こそ、民俗学の拠りどころだったからである。

完結した組織体としての古い村——これは、大枠としては、今なお民俗学の基本をなしている観念である。民俗学の観念であるだけではない。集住の歴史においても、完結した村落こそゲルマン人の定住の原初的形態を示しているという考え方が、永く疑問の余地のないものとされてきた。

民俗学と歴史理論とは交流を重ねながら、閉鎖的で完結性の高い村社会のイメージを作り上げ、そこに軸足を置いて考察を重ねてきた。先ずそれ自体の問題性を改めて認識する必要がある、と言う。そこでは概ね二つの問題が見逃されてきた、とされる。ひとつは、その完結した村落を上古のゲルマン人の定着にまで遡らせて、その延命のようにとらえてきた歴史学の誤りである。古くからの村落と見える場合にも、実際には歴史の変動を幾度も経過し、時には特定の時点に新しく形成されたものであったり、住民の大多数が入れ替わることも珍しくはなかったのである。もうひとつは、完結した動きの少ない安定した村落のイメージは、19世紀後半の農村ロマンティズムの産物であり、したがってその頃ヨーロッパ文化を広く被った思想潮流がつくり上げた観念だったことである。当時流行した農村小説は、農村を牧歌的に描く場合も、因習と迷信の巢窟として描く場合もあるが、そのいずれにせよ、人間の集住の原風景として理解されてきた。その点では、静的で没歴史的な村落のイメージは、むしろ進展する近代が作り出した観念のひとつとも言える。もっとも細かくみれば、それが19世紀後半から20世紀に及ぶ社会変動の実態と絡んでいる面もないではない。工業社会の進展は、都市を工業生産の中心として発展させたが、それは工業発展の初期の段階にその現場であった農村から工業を奪う過程でもあった。近代社会の進展が農村をより農村的に変えていったという経緯もあったのである。ともあれ、農村はどの時代にも歴史的変遷と流動のなかにあったのである。

以上を踏まえた上で、改めて村落を考察すると、そこには村落は決して静的な場所でも牧歌的でもなく、絶えず人間の流出や流入があり、また工業社会への展開の一段階の舞台です



らあったが、それにもかかわらずそれが完結した空間の側面をもっていたのも事実であった。それは歴史発展の外にあったからではなく、端的に科学的な技術機器がなお浸透していず、生活世界が科学技術世界になり切っていなかったためである。それをバウジンガーは、〈場所の単一性〉と表現した。原語は〈Einheit des Ortes〉で、これは古典演劇の作劇上の原理論として知られる三一一致の法則のひとつ、すなわち演劇の空間設定は揺れ動くのではなく、できるだけ一箇所に限定すべし、との要請である。なぜその用語がここに使われることになったのであろうか。バウジンガーは、ドイツ語の〈Ort〉が〈場所〉と〈村〉の両義をもつことを活かすことを選び、より一義的な〈Dorf〉(村)を避けたのであるが、その事情を次のように説明する。

〈場所 [オルト] の単一性〉の術語がドラマトゥルギーに由来することは、改めて言うまでもない。この比較は当を得たものではないかも知れない。またドラマトゥルギーの術語のひとつをいきなりこんなところへ持ち込んだりすれば、その術語そのものを破壊することにもなりかねない。とは言え、これはこれで熟慮の末に選択したのである。〈村落 [ドルフ] の単一性〉と言ったのでは、何となく一体的なものを連想してしまう。つまり、すべての部分が調和的關係になる完結した有機体というイメージが重なってくる。それに較べて、〈場所の単一性〉と言えば、何よりも先ず、できごとが生起する空間の境界表示に注意が向くことになる。なおここで言うできごとには、いちじるしく多面的な性格や、多種多様な行動や、さらにまた行動におけるきわめて多彩なモチーフまでもが含まれている。対立的な要素も入ってくる。またそうであるときにはじめて、舞台の上にドラマが成立する。しかしそれは、まことに複雑、かつ幾重にも重なりあったできごとである。そして、かかる複雑な様相を明瞭な地平のなかに位置づけるためにドラマトゥルギーが設定したひとつの道が、場所の単一性であった。ここで場所の単一性と言うのはかかる意味においてであるが、またその意味においては、それは現実の事象でもある。しかしその現実性は、ひとつの場所 [オルト] (村) を貫いて作用する倫理的な原理によるのではない。できごとの複雑さと理解可能性の境界を区切る地平によって、言い換えれば、その地平の彼方にあるものは、視野に入っていないことによって成り立つのである。

空間の〈地平〉について具体例を挙げれば、いわゆる観天望気や、地名の入った種々の言い回しなどによって、それが機能していたことが確かめられる。すなわち、〈○○山が帽子をかぶれば、明日は晴れる〉といった気象の諺、〈○○風 [おろし]〉などの風の名称、あるいは〈奴は○○送りだ〉のような特定の墓場や精神病院の名前の入った成句、これらは、元はそれが口にされる土地でしか成り立たない言語表現であり、そうである以上、一種の境界の存在をしめしている。そしてさまざまな境界が重なりあって、全体として狭域的な地平が形

成されるのである。

もとより向こう側を全く見通すことができず、通過もできない地平といったものはありえないが、かつてはかなり強固な地平が存在したのであり、逆にそれが強固であったからこそ、わずかな見通しや稀な通過に甚大な意味がこめられたのであった。たとえば、嫁とりは必ず隣村からという慣行や、隣村から忍んでくる男を古井戸に投げ込む制裁などである。しかしその地平に科学技術世界が浸透する。すなわち自動車や自動車でいった交通手段が生活の場に浸透すれば、それだけでもさまざまな変化が起きる。隣村を通り越した通勤が始まれば、距離感覚も大きく変わり、隣村の意味は根本的に異なってくる。それどころか、隣村という境界そのものを維持することができなくなる。境界には孔があき、在来地平は崩壊する。それを追って市町村の合併が起きてもすれば、隣村は跡形も無く消滅する。

しかしまた地平の崩壊は、手仕事を一朝にして過去のものに変えてしまう技術機器の直接的な効果によってのみ起きるのではなく、間接的な作用によることも大きい。逆に言うと、科学技術世界はその幅広い波及効果と他の要素とも結合することができる側面においても考察しなければならない。ドイツ語圏において、その大きなものは政治的な動向との関係である。国民国家の展開であり、またナショナリズムである。ドイツ語圏で19世紀を通じて〈Verein〉と総称される新しい種類の団体が数多く成立したが、それは多かれ少なかれ本格化する国民国家の歩みと重なっていた。〈フェライン〉は自発的な団体ではなく、特定の目的のために結成された民間の自主的な団体が好んで冠した名称である。政治目標や宗教的な理念を掲げた団体だけでなく、スポーツや郷土文化の保存・振興まで幅広い分野にわたっているが、それが広い意味での政治とかさなっていたことは、体操協会の広まりがよく示している。また郷土文化が郷土の人々によってもそれまでとは違った側面から認識されるようになったことも、これと関連している。バウジンガーはスポーツ・クラブの普及と並べて、民謡の保存や普及をめぐる動きにも注目した。

ふるさと (Heimat) という言葉は、以前はめったに用いられず、またもちいられる場合にも、その多くは、今日とは別の意味であった。話し言葉 (Mundart) を丹念にさぐってゆくと、ふるさと (ハイマート) とは、今なお第一義的には、両親の家、あるいは家屋敷の意味である。またこれに対応して、アウスラント (訳注: 通常は外国の意) も、1800年頃までは屋敷の外側の畑地を指す言葉として使われていた。ハイムヴェー (Heimweh ホームシック、郷愁) の語となれば、広まったのは、ようやく19世紀に入ってからであった。しかしこれはその後、民俗的な歌謡や方言詩歌をたちまち席卷してしまった。したがって今日概念としてのふるさと (Haimat) の普及は、地平の崩壊と密接に関係していたのである。

郷土の歌謡を保存することを謳った協会が各地で成立しはじめるのは1820年代であるが、やがてそれは喉自慢大会を派生させた。1834年にオランダ東部で催された歌謡コンクールがその嚆矢とされるが、それを成り立たせている脈絡は、郷土の民謡をしきたり通りの機縁に歌うことではなく、郷土の歌謡の伝承価値を認識し、それを広く宣言することにある。そのとき、郷土歌謡をうたう人は、自分の郷土と同じ価値をもつ他の多くの郷土を認識しているであり、その点では特定の郷土に閉じ込められた存在ではない。自己の郷土を相対化しているのである。相対化とは対象を意識することに他ならないという点では、そのとき意識は、郷土歌謡の言語である特定の国語の境界へと延びてゆくであり、それゆえ必然的に、国民国家の境界に重なってゆく。

むしろ郷土価値を認識するように誘導したのは、国民国家の管理中枢であり、従って郷土の客観視化の内実とは国家意識や国民意識に他ならない。もとより、それは歌謡だけのことではなく、郷土文物の認識に一般的にあてはまる心理の動きでもある。すなわち郷土意識とは、国民国家の意識のことである。狭い特定の地域的郷土への帰属をことさらに言い立てることが、国民国家への帰属に自己のアイデンティティを確かめることを内実とするというパラドックスである。またこれが、近・現代における〈ふるさと〉の性格でもある。

そのなかで今日頻繁に使われる意味でのふるさと（ハイマート）が前面に出るのは、次のような脈絡がみとめられる。

ふるさと（ハイマート）がいよいよ頻繁に歌われ、またプラスの方向の価値をもつようになるのは、19世紀に入ってからのものであった。そしてそれ以来、ふるさととふるさと性への注目は、みるみるうちに高まった。しかもそれと同じ時期には、かつての地平と、地平によって区分された作用圏の崩壊が進行し、また未知の空間への延び行きが促進されたのであった。この二つの動きは、対立と相関の両面から見なくてはならない。ひとつは世界全体が多かれ少なかれ劇場化の趨勢を示しており、そのため前代の地平の代わりにふるさとらしきという書割を据えて、作用圏が崩壊するのを防ごうとする動きが起きたということである。

ここで注意しなければならないのは、空間の膨張とは地平の崩壊のことであるが、それは〈ふるさと〉の観念の止めどない発展にみられるように、民俗文物が消滅するのではなく拡散することでもある。もとよりそこには古い時代の〈ふるさと〉から今日の意味での〈ふるさと〉への変質と同じ変化が起きている。そして、それらも科学技術世界の進展であるが、科学的な技術機器の直接の効果だけでなく、間接的な影響という性格にある。それは科学技術によって後押しされた国民国家の成長が直接的な刺激を得るのである。

そうした空間の膨張を個々の局面、すなわち民俗の現場において観察すると、二つの大き

な要素がはたらいっていることが分かる。ひとつは〈文物の転用〉であり、もうひとつは〈エキゾチズム〉である。空間の膨張の最後として、次にそれを取り上げる。

(つづく)

## 注

- 1) 参照, 拙論『バウジンガーを読む—〈科学技術世界のなかの民俗文化〉への案内』(愛知大学国際コミュニケーション学会『文明』第2号, 1999年, p. 101-118.)
- 2) Hermann Bausinger, *Volkkultur in der technischen Welt*. Stuttgart [W. Kohlhammer] 1961, 2. Aufl.-Frankfurt / New York [Campus Verlag] 1986. 次の拙訳を参照, 『科学技術世界のなかの民俗文化』(愛知大学国際コミュニケーション学会紀要別冊ディスカッション・ペーパー No. 2, 2001年)
- 3) 丹本-阿莫斯・著 李揚・訳「《科学世界中的民間文化》序言」(『民俗学刊』第4輯, 中山大学民俗研究中心, 澳門出版社, 2003年6月, p. 20-22)
- 4) ツーリズムのなかでの民俗要素の活用は今日では至るところで見られる一般的現象と言ってよい。その各国の研究動向や事例報告を知るには, 隔年で刊行されている次の文献目録の“Tourism”あるいは“Folklorism”の項目を参照。 *Internationale Volkskundliche Bibliographie — International Folklore and Folklife Bibliography*; Bonn [Habelt]; また筆者の身近な経験では, 2002年6月に来日した趙宇共氏(西安市社会科学院民俗文化研究所長)は, 「中国における伝統の復活」と題した講演その他において, 文化大革命によって否定され途絶えていた伝統的な民俗や行事が最近各地で復活していること, またそのさいには故習の単なる復活ではなく, 現代的な脈絡が走っていることを西安市の豊富な事例を挙げながら教示された。
- 5) Hermann Bausinger, *Lebendiges Erzählen. Studien über das Lebden volkstümlichen Erzählgutes auf Grund von Untersuchungen im nordöstlichen Württemberg*. Tübingen 1952. Hermann Bausinger / Markuks Braun / Herbert Schwedt, *Neue Siedlungen. Volkskundlich-soziologische Untersuchungen des Ludwig des Uhland-Instituts*. Stuttgart [Kohlhammer] 1959, 2. veränderte Aufl. 1963; 後者には筆者による次の抄訳がある。ヘルマン・バウジンガー/マルクス・ブラウン/ヘルベルト・シュヴェート『新しい移住団地東ヨーロッパからのドイツ人引揚民等の西ドイツ社会への定着にかんするルートヴィヒ・ウーラント研究所による民俗学・社会学調査』(愛知大学国際問題研究所『紀要』第94号 [1991] 以下)
- 6) 参照, 拙論「民俗学における個と社会——20世紀初めのフォルク論争を読み直す」(1)~(5) (愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』第6号, 2001年, ~第11号, 2003年)
- 7) これと同種の現象は私たちの周囲でも日常的に見出される。例えば, 愛知県豊橋市は市電の走る町として「市電サミット」の会場にもなったが, 市電愛好家でもある詩人の絵入り文集には, 期せずしてヘルマン・バウジンガーの命題を思わせる次の文言が見出される。〈市電の通る街, まるで自然のように〉(伊藤彦定『豊橋いま, むかし 市電のある風景』1987年)
- 8) 科学技術の民話としてバウジンガーは, 砂で出来た紐の話などを挙げているが, その種類で近世ヨーロッパに行なわれた民話の類型としては, 鉱山師をめぐる話類, たとえば磁石を用いて不可思議を行なう鉱山師の話類や, 印刷所に幽霊が出るとの伝承などがそれにあたるであろう。もっとも幽霊の話類は, 牧師の住居などにも見られるもので(いわゆる牧師館の幽霊), 決して科学技術にだけ特有のものではない。特殊な能力や技術や知識によって一般世間から際立っている場所への複雑な心理が土台になって, その種類の幽霊譚が発現したと見ることができるであろう。またその種の現象を日本に当てはめれば, 寺子屋や武家屋敷をめぐる怪異譚が注目に値しよう。